

## エドワード二世宮廷における男同士の絆

— *Vita Edwardi Secundi*を中心に—

常木 清夏

The nature of the relationships between King Edward II (1284–1327) and his two favourites, Piers Gaveston (d. 1312) and Hugh Despenser the younger (d. 1326), has been interpreted as homosexual. However, it is difficult to draw conclusions about the relationships' exact nature and so this paper instead focuses on what contemporary accounts in the chronicle *Vita Edwardi Secundi* reveal about the chronicler's attitude towards their relationships. The court of Edward II is described as a highly homosocial environment in which bonds among men were extremely important. In this respect, the close relationship between the king and Gaveston was acceptable. It was the relationship's exclusivity which was problematic. Meanwhile, the reasons why Despenser was criticised are different. He is primarily accused of the ruthless expansion of his estates and management of his economic activities. However, in the final part of *Vita Edwardi Secundi* the attitude of the queen towards the relationship of the two men is chronicled, with the queen accusing Despenser of interfering in her relationship with the king. This could be interpreted as homosexual bashing, and could suggest that this difference of criticism between Gaveston and Despenser reflects changes in contemporary attitudes towards sexuality in the early fourteenth century English court.

キーワード：エドワード二世、年代記、ソドミー、ホモソーシャル、ホモセクシュアル、宮廷社会

## はじめに

14世紀イングランドの国王エドワード二世（Edward II、1284-1327 在位1307-1327）の治世は波乱に満ちている。対外的には、スコットランドとの戦争に敗北し、対フランス政策では失策を重ねた。国内では、諸侯主導の政治改革が幾度も試みられ、その都度内乱が生じた。最終的には、国王の廃位という劇的な形で治世が終わる。そのドラマティックな治世において、エドワード二世に対し終始忠実で「深い結びつき」があったとされる二人の男性がいる。ガスコーニュ出身の貴族ピアズ・ガヴェストン（Piers Gaveston、1312年没）とヒュー・デイスペンサー二世（Hugh Dispenser the younger、1326年没）である。エドワード二世と彼らの関係は、ホモセクシュアルであったか否かというセクシュアリティの観点から長らく議論されてきた<sup>1</sup>。しかし、彼らの関係の性質を問う議論は平行線を辿り、決着がつかそうもないことから、近年は彼らの関係が周囲からどのように受容されていたかという議論へと

論点がシフトしつつある<sup>2</sup>。

本稿では、史実との整合性の高さや豊富な叙述によって極めて重要な史料であるエドワード二世治世と同時代に書かれた年代記『エドワード二世伝 (*Vita Edwardi Secundi*)』<sup>3</sup>を分析対象とし、治世前半の寵臣とされているガヴェストンと治世後半の寵臣とされているディスペンサー二世（以下、父親のヒュー・ディスペンサー一世と区別する時を除いて、ディスペンサーと記す）と国王との関係が、同時代の年代記内でどう描写されているのかを読み直す。年代記を分析することで、エドワード二世治世に生きた年代記作者が国王と二人の有力な男性の関係をどう捉えていたのか、もしくはどう示そうとしたのかということを読み解くことが可能になる。そこから、14世紀初期イングランドにおいて、有力な人物を宮廷から排除しようとする際に、ホモソーシャルとホモセクシュアルを利用した言説が使用されていることを指摘する。また、何故その使い分けがなされているのかを分析することで、エドワード二世の治世中に、宮廷を取り巻く人々の間でセクシュアリティに対する意識が変化した可能性についても考察したい。

## 1. 年代記*Vita Edwardi Secundi*

今回取り上げる『エドワード二世伝 (*Vita Edwardi Secundi* [以下、*Vita*と記す])』と呼ばれている年代記は、著者が当時の宮廷における政治的出来事を直接見聞きできる立場にあったと指摘されているほど史実との整合性が高く、それぞれの出来事の詳細とそれに対する著者の意見が細かく記されており、エドワード二世治世を扱った同時代の年代記の中では最も内容が充実している年代記である<sup>4</sup>。著者は未だ不明であるが、在俗聖職者だと考えられている<sup>5</sup>。年代記の内容から察するに、著者は神学や法、古典、歴史、騎士道物語などに精通しており、高い教育を受けた人物であるとされる。

扱われている時期はエドワード二世が即位した1307年から王妃イザベラと王太子エドワードがフランスからの帰国を拒否して国内騒動が起きている1325年までである。著者がこの年代記を書き始めたのは1310年から1311年、遅くとも1312年から1313年頃とされる。王妃は1325年にイングランドへの帰国を拒否した後、1326年9月に軍を率いてイングランドに上陸している。しかし、年代記の文章から判断するに、著者は王妃のイングランド上陸を知らないように見受けられる。それゆえに、著者が最終的に書くことを中断したのは年代記の終章である1325年12月からイザベラがイングランドに上陸するまでの間であるという説が一般的である<sup>6</sup>。ガヴェストンが処刑される頃までの記述は、同時期に書いたのではなく、後でまとめたものではないかと推測されているが、中盤から後半にかけては時間の流れと共に人物評や考察の変化が見られる上に、仮に後年になってまとめたとすればその時点では既に明らかになっているはずの情報を知らないで執筆しているという矛盾が生じるため、タイムラグが比較的少なく、ほぼ同時代に書き進められていたと推測されている<sup>7</sup>。

*Vita*には文学的な工夫や装飾的な文章が頻繁に見られ、単なる出来事の記録というよりも文学的な歴史物語のようである。全体的に説教形式の書き方で、傲慢や強欲などの悪徳を厳しく弾劾し、厭世的な価値観を持つ。また、同時代の他の年代記は『歴史の華 (*Flores Historiarum*)』<sup>8</sup>の要約を用いるなど、別の年代記からの参照が見られることが多いが、*Vita*は現存する他の年代記叙述を参照せずに書かれていると見られており、逆に*Vita*を参照していると思われる年代記も現時点では存在していない。これは、書かれた後すぐに秘匿され、広く流布することがなかったためと考えられる。この点は、かなり特殊で

あると言わざるを得ない。しかし、叙述内容の正確さと物事に対する洞察の鋭敏さから、*Vita*はエドワード二世治世を考察する際に欠かせない史料の一つとして、分析するに値する対象であると判断し得る。

## 2. *Vita Edwardi Secundi*の描写

トマス・バートン (Thomas Burton) の『モー年代記 (*Chronicle of Meaux*)』<sup>9</sup>のようなエドワード二世治世より後に書かれた年代記と *Vita*を比較して決定的に異なる点は、エドワードとガヴェストン、ディスペンサーがソドミーであったと明確に記述した箇所がないことである。『聖ポール司教座聖堂年代記 (*Annales Paulini*)』やロバート・レディング (Robert Reading) の『歴史の華 (*Flores Historiarum*)』のようなエドワード二世治世に書かれた年代記は全て、*Vita*と同様の特徴を有している<sup>10</sup>。つまり、現代においても未だ根強く残っている「エドワード二世とガヴェストン、またディスペンサーの関係はソドミーであった」というイメージは、主に後世において形成されたものである。それでは、同時代の年代記は彼らの関係をどのように描写し、批判しているのだろうか。*Vita*を分析対象として、同時代に生きた年代記作者が彼らの関係をどう描いたかを考察する。

まず、国王とガヴェストンの関係に対する *Vita*の描写を分析する。ヨッヘン・ブルグトーフ (Jochen Burgdorf) は、エドワード二世治世に書かれた年代記がエドワードとガヴェストンの関係をどう描写しているかを、親密さ (familiarity)、友情 (friendship)、兄弟のような親密な関係 (brotherhood)、愛 (love) の四つの主題を軸にして分析し、その上で諸侯がこの関係に反対した理由を政治的な文脈から考察することで、セクシュアリティが問題の一面に過ぎないことを明らかにした<sup>11</sup>。しかし、この四つの主題に含まれている内容は、ブルグトーフが述べるような二人の関係を明らかにするだけのものではない。宮廷内の調和を維持するために宮廷内の人々に共有されていた考え方も明らかにしている。その共有されていた考え方は、宮廷内において男同士の絆を安定的に維持することを目的としており、14世紀のイングランド宮廷においてホモソーシャルな繋がりが極めて重要視されていたことを示している<sup>12</sup>。これまで、中世ヨーロッパのホモソーシャルな絆については、男性らしさ (masculinity) の観点からの議論がなされてきており、騎士道が主たる分析対象として語られてきた<sup>13</sup>。また、エドワード二世とガヴェストンの関係についてはピエール・シャプレー (Pierre Chaplais) が、彼らの関係はホモセクシュアルではなく誓いを立てた擬似兄弟関係であったという説を提唱している<sup>14</sup>。シャプレーのこの説は、二人の関係をホモセクシュアル以外の観点から見直そうとしている点が特徴的であるが、宮廷全体の男性同士の連帯関係について考察するものではない。そこで、本稿では14世紀イングランド宮廷において重要視された男同士の絆を年代記から具体的に明らかにすることで、中世の宮廷内においてもホモソーシャル関係が存在していたことを指摘し、その内容について考察したい。

次に、国王とディスペンサーの関係に対する *Vita*の描写を分析する。エドワード二世治世に書かれた年代記の中で、ディスペンサーとエドワードの関係がどのように批判されていたかという研究の蓄積は未だ不十分であるといえる。*Vita*の中でディスペンサーがどのように批判されているかを分析した上で、同じように寵臣とされているガヴェストンと比較する。それにより、両者の相違点を明らかにすることができる。

## (1) ガヴェストンに関する描写

まず、ハウスホールドのメンバー (*familiaris*) という主題でガヴェストンとエドワードの関係を考察する。*Vita*によれば、エドワードが王太子であった時に、ガヴェストンは彼のハウスホールドの *familiaris* になり、「自分の務めにおける気持ちの良い働きによって」瞬く間に主人であるエドワードから一番の寵愛を勝ち取った<sup>15</sup>。この *familiaris* というのは *familia* つまり「ハウスホールド」の内で扶養されている集団の一員、「ハウスホールドのメンバー」という意味である。別の箇所では、「老王エドワードの存命中、ピアズは若いエドワードの、極めて親密で (*familiarissimus*) 大変寵愛された寝所部侍従であった」と書かれている<sup>16</sup>。「ハウスホールドのメンバー」としての *familiaris* と、「親密な相手」としての *familiaris* は同じ言葉が使われていることからわかるように、ハウスホールドのメンバーと親密であることは、別段珍しいことではない。*Vita*の著者自身でさえ、「あるハウスホールドのメンバー (*aliquis de familia*) が領主の好意からなる特権を享受していることは、今日どの貴族の家でも起きている」と認めている<sup>17</sup>。そうであるならば、諸侯がエドワードとガヴェストンの関係において問題にしているのは何だろうか。ガヴェストンがただの *familiaris* ではなく、「*familiarissimus* [「親密な」という意味の *familiaris* の最上級]」の言葉が示すように極めて親密なハウスホールドのメンバーであったという点だと推測される。親密さが *familiarissimus* になると、一体どのような弊害がおきると諸侯は考えたのだろうか。具体的な例として、*Vita*には「伯やバロンが王と話そうと王の部屋を訪れても、ピアズがそこにいる間は、王はピアズ以外には誰も話しかけたり、親しげな表情を見せたりしなかった」<sup>18</sup> ということが記されている。これは、「全ての人々が国王の目の中に好意 (*gracia*) を見出すことが望ましい」中であって、「ガヴェストンのみが王の好意 (*gracia*) と歓待 (*vultus*)、激励 (*hilaris*) を受け取った」という非常に問題視される状態なのである<sup>19</sup>。このように、ガヴェストン「のみ」が王の好意を受け取っていることが、他の諸侯がガヴェストンを嫌悪する理由になっており<sup>20</sup>、諸侯はガヴェストンに嫉妬心を抱いた<sup>21</sup>。その結果として、諸侯はガヴェストンをこれ以上国王と親しく (*in familiaritate regis*) させないために彼を追放し<sup>22</sup>、諸侯主導による1311年の改革勅令ではガヴェストンのみに留まらず、「たった一人のハウスホールドメンバー [*familiaris* に相当する] さえ、自分の意思で手元に置くことが許されない」とエドワードが激怒するほど徹底して、ガヴェストンと親しかった者や支持者も宮廷から追放しようとした<sup>23</sup>。以上のことから明らかになるのは、*familia* (ハウスホールド) のメンバーを引き立てること自体は問題ではないが、その引き立てが *familiarissimus* (最上級) になってしまうことで宮廷内での男同士の秩序を乱すことは問題であるという考え方が、宮廷内で共有されていたということである。

次に、友人 (*amicus*) という主題で二人の関係を考察する。ガヴェストンはエドワードの友人 (*amicus*)、しかも「特別な友人 (*specialis amicus*)」であったことが *Vita*には記されている<sup>24</sup>。友人 (*amicus*) や友情 (*amicitia*) という言葉は、王とガヴェストンの間だけに使われているわけではない。王と他の諸侯、ガヴェストンと他の諸侯の間にも使われている。*Vita*によると、関係が悪化したエドワードとランカスター伯の和解の場として1318年に宴が執り行われるが、その場で二人は「長時間、親密に話をし、友情 (*amicitia*) と相互の親善を再確認して、約束の印としてともに食事をした」と書かれている<sup>25</sup>。別の例としては、リンカーン伯ヘンリー・ド・レーシーは元々、ガヴェストンに「好意と友情 (*favor et amicitia*)」を持っていたが、1308年にガヴェストンがアイルランドに追放された際には、ガヴェストンの敵対者の一人となっている<sup>26</sup>。この追放の後、ガヴェストンはすぐにイングランド



に戻ってくるが、帰国直後は反ガヴェストンであったはずの諸侯が穏やかになっており、リンカーン伯は「友好的な仲介者 (amicabilis compositor) と調停者」となっており、同じくガヴェストンと敵対していたサリー伯ジョン・ド・ワーレンも「不可欠な友人 (necessarius amicus) で忠実な助力者」に変っていた<sup>27</sup>。エドワードとランカスター伯の例、そしてガヴェストンとリンカーン伯ならびにサリー伯との例から、争いによって絆に亀裂が入った際は「友情」によってそれが回復されるという考え方が宮廷内で共有されていたと考えられる。すなわち、宮廷社会の秩序を維持する上で必要な関係を修復させる際に、「友情」の語が意図的に用いられていると指摘できる。しかし、このような関係修復において用いられた「友情」は、エドワードとガヴェストンの関係で用いられている本来の意味の「友情」とは異なり、永続的ではない。そのことを示すように、ガヴェストンは諸侯の反発によって再び追放された。また、エドワードとランカスター伯の関係も結局好転せず、両者は1322年にバラブリッジで衝突し、ランカスター伯は国王軍に敗れて処刑された。

エドワードとガヴェストンの関係を示す第三の主題は兄弟のような関係 (frater) である。*Vita*の中でエドワードはガヴェストンのことを公に兄弟 (frater) と呼んでいる。最初にその記述が出てくるのは、ガヴェストンが追放先のアイルランドから戻った1309年のことで、王は「ガヴェストンの帰還を喜び、まるで自分の兄弟であるかのような立派なやり方でガヴェストンを喜んで出迎えた。実際、王はガヴェストンのことをいつも兄弟と呼んでいた」とある<sup>28</sup>。1311年に、諸侯からガヴェストンの国外追放に同意するように求められた時、エドワードは「汝は我が兄弟ピアズの迫害を止めて、彼がコーンウォール伯領を所有することを認めるべきである」と返答している<sup>29</sup>。また、1312年にガヴェストンが亡くなった後で、*Vita*は「王が兄弟に選んで (quem rex adoptauerat in fratrem)、息子のように可愛がり、仲間や友人のようにみなしていた重要な伯を、彼ら (諸侯) は殺害した」と述べている<sup>30</sup>。ブルグトーフは、王が別の王を「兄弟」と呼ぶ習慣があったことを指摘して、エドワードとガヴェストンの間にまつわる兄弟という言葉は、血の繋がりや精神的な繋がり、契約上の義理の兄弟であること等を意味しているのではなく、ガヴェストン自身は王でないにも関わらず、王と同等の扱いをされていることが問題だったと主張している<sup>31</sup>。実際に*Vita*には、ガヴェストンが「まるで第二の王のように」威張り散らして<sup>32</sup>、「彼が見せる傲慢さは、それが王の息子のものであったとしても耐え難いだろう。しかし、彼は王の息子でもなければ、どんな王家とも全く関係がないことは、広く知られている」と記されている<sup>33</sup>。以上のことから、ガヴェストンのように宮廷内で特定の者だけが国王からfrater (兄弟) と呼ばれて王と同等の扱いをされてはいけないという考え方が宮廷内で共有されていたと指摘できる。

エドワードとガヴェストンの関係を示す第四の主題は愛 (amor) である。*Vita*には、エドワード二世が王位についた後、「諸侯は王の愛着 (voluntas) をガヴェストンから引き離すことができず、諸侯がエドワードの好意 (gracia) を消そうとしていると聞けば聞くほど、彼の愛 (amor) は増し、ピアズへの優しさ (affectio) も増すのだった」という記述がある<sup>34</sup>。また、エドワードはガヴェストンを彼自身の名ではなく「コーンウォール伯」と呼ぶようにと公に布告するほど、ガヴェストンに「揺ぎ無い愛 (continuuus amor)」を向けていたとも記述されている<sup>35</sup>。古典ラテン語において肉体的な欲望を含む愛情を意味するamorという語は、13世紀以降のラテン語においては「(君主の) 恩顧」としての意味でも使用され、性的な含意を含まない使い方もされる<sup>36</sup>。実際に*Vita*の中でも、amorは国王とガヴェストンの間でのみ使われているのではなく、王と他の諸侯の間に生じるべき絆の一つとしてもamorが使われている<sup>37</sup>。

このように、エドワードとガヴェストンの関係そのものは、ハウスホールドのメンバー (*familiaris*) であり、友人 (*amicus*) であり、兄弟のような関係 (*frater*) であり、愛情 (*amor*) を寄せた相手として、封建的主従関係の社会で主従間の関係を表す典型的な語で説明されている。そのような典型的な主従関係の枠組みに入っているにも関わらず、エドワードとガヴェストンの関係が批判されるのは、エドワードがガヴェストンに関して「節度を守った愛情を示すことができない」といった表現で示されているように、彼らの関係が宮廷内において許容できる範囲を超えているからである<sup>38</sup>。つまり、ホモソーシャルな絆に基づく宮廷内の調和を安定的に維持するために、王と一部の者との絆だけが強くて他の臣下が蔑ろにされるのは許されないという考え方が宮廷内では共有されており、その考え方から逸脱した振る舞いを国王にさせた原因としてガヴェストンは批判されている。そうであるならば、*Vita*はガヴェストンのみを批判しているように見せかけながら、逸脱した振る舞いをした張本人である国王エドワードをも非難しているのである。

## (2) ディスペンサーに関する描写

ディスペンサーについては、*Vita*はどのように描写しているのだろうか。実は、ガヴェストンに比べて、王とディスペンサーの関係について説明されている箇所はそれほど多くない。「王と特別に仲が良い者 (*regis speciales precipui*)」や「王の〔自分に対する〕恩顧に自信を持っている (*de regio favore confisus*)」という箇所が指摘できる程度である<sup>39</sup>。ガヴェストン批判の際は、前章で論じたように、ガヴェストンの性格や王との関係に言及した批判を多数載せており、政治的な理由でガヴェストンを直接非難している箇所は極めて少なかった。ディスペンサーはそれとは対照的に、政治または経済活動の文脈での批判が大半である。ディスペンサーは、妻の相続財産の結果としてウェールズ辺境の所領グラモーガンを得た後、この地方において強引な勢力拡大を行い、近隣地域の諸侯の猛反発に合う。*Vita*の著者はこの騒動をかなりの枚数を用いて描写しており<sup>40</sup>、ディスペンサー父子は「邪悪な助言者、詐欺師と共謀者、人民の破壊者、王冠・王権の富を食いつぶす者、王と王国の敵」<sup>41</sup>であるために国外追放に至ったと説明している。ディスペンサー父子に対するこの説明は*Vita*独自のものではなく、1321年7月にウェストミンスターで開かれたパーラメントで読み上げられた内容でもある。*Vita*の著者は、父親であるディスペンサー一世を「残虐で欲深い (*ferus et cupidus*)」と描写した上で、息子であるディスペンサー二世の「邪悪さ (*malicia*) は父親の過酷さ (*severitas*) を上回っている」と説明している<sup>42</sup>。ディスペンサーとガヴェストンは、双方とも寝所部侍従を経験し、エドワードの姪を妻にもらっているという似た立場にあったにも関わらず、ガヴェストンが描写される際に用いられた*familiaris*や*amicus*、*frater*、*amor*といった語はディスペンサーには使用されていない。*Vita*は、二人の国王との関わり方、または周囲の受け止め方が、ガヴェストンとディスペンサーで異なっていたことを示している。

その他のディスペンサーに対する*Vita*の描写で特徴的なのは、ディスペンサーと王妃イザベラとの関わりである。1324年、王妃イザベラはサン・サルド戦争の戦後処理とエドワード二世のフランス王に対する臣従礼の問題解決のために、フランス宮廷へ使節として赴くこととなった。この時の様子を、*Vita*の著者は「王妃は大変喜んで出発した」としており、その理由の一つは自分の生まれた土地と親戚を訪問できることであったが、もう一つは「好感を持っていない (*non diligebat*) 幾人かの者たちから離れられる」からであり、「確かに彼女はヒューに好感を持っていなかった (*Nimirum si Hugonem non diligit*)」と続けている<sup>43</sup>。そして、「多くの者は、ヒュー・ディスペンサーが完全に王の傍から追い出

されるまで彼女は戻らないだろうと考えた」と述べている<sup>44</sup>。イザベラがデイスペンサーを好まない理由としては、彼女の叔父にあたるランカスター伯トマスがデイスペンサーによって滅ぼされたこと、デイスペンサーによって彼女の土地が没収されて従者が追い出されたことが挙げられている<sup>45</sup>。しかし、翌年になって、イングランドに帰国するようにイザベラを説得に来たエドワードの使者に対する彼女の返答からは、それまでとは幾分違った嫌悪の理由を窺い知ることができる。シーモア・フィリップス (Seymour Phillips) が、彼の著書であるエドワード二世の最新の伝記の中で「劇的であると同時に公的な返答」<sup>46</sup>と説明しているイザベラの有名な台詞は以下の通りである。「私が思うに、結婚というのは男性と女性の結合 (conjunctio) であり、生活のしきたりを共に固守するものである。ある者が私と夫の間を裂いて、この絆 (vinculum) を壊そうとしている。私はこの侵入者が排除されるまで戻らなもりはないことを宣言する」というのである<sup>47</sup>。「侵入者」がデイスペンサーを指しているのは、これまでの文脈からも、そしてその後の王の対応からも明らかである。これは極めて強烈な印象を与える告発である。デイスペンサーの存在は、政治的な対立から生じた「国民の敵」という立場から、突然ドメスティックな舞台に転換させられて、「結婚を破局に導く者」として描き出される。結合 (conjunctio) という語は中世ラテン語においては、「結婚」そのものも意味するので<sup>48</sup>、この返答は「結婚というのは男性と女性の間で行われるべきものである」ということを改めて主張していることにもなる。それはまるで、デイスペンサーが偽の「妻」であるかのように王の傍に寄り添っていることを告発しているようにも受け取れる。このイザベラの回答には、デイスペンサーが「男色者 (ソドマイト)」であるという言葉こそ使用されていないが、自然に反した行為を行っているという典型的なソドミーの告発形態が用いられており、極めて明白なホモセクシュアル批判が行われている<sup>49</sup>。*Vita*の記述によれば、彼女の弟であるフランス王シャルル四世もその場にいたというのだから、イザベラのこの返答は公に発せられたということであり、イザベラが述べたこのデイスペンサーに対するホモセクシュアル批判は、フランス宮廷内、そして使者によってイングランド宮廷に伝わったと理解できる。

このように、政治や経済活動上での罪によってそれまで論じられてきたデイスペンサーに対する批判は、彼に対する反感が最高潮に達したエドワード二世治世末期に突然、それまでの罪の種類とは全く異なった性格である「セクシュアリティに関する罪」が「被害者」である王妃の口から暴露されるという図式で締めくくられる。*Vita*の記述は、王妃のこの返答に対するエドワードの演説や王妃を説得するための司教たちの手紙の写しが載せられた後、王妃と王太子は「イングランドに戻ることを拒否した」という文を最後に1325年で途切れている。王妃はイングランドへの帰国を拒否した後、翌1326年には軍を率いてイングランドに上陸する。そしてデイスペンサーは処刑され、国王エドワードは廃位される。帰国拒否より後のこの一連の流れを*Vita*の著者がどう見たかはわからない。しかし、エドワード治世終了間際において、デイスペンサーの罪にホモセクシュアル批判が付け足されたことは、大きな特徴として述べることができる<sup>50</sup>。

## おわりに

ここまでエドワード二世治世における二人の主要な人物ピアズ・ガヴェストンとヒュー・デイスペンサー二世が、同時代の年代記*Vita Edwardi Secundi*にどのように記述されているかをそれぞれ分析してきた。エドワードとガヴェストンの深い絆の描写だけでなく、二人の絆に嫉妬心を抱いていた諸侯の姿



を繰り返し描写することによって、*Vita*はエドワード二世宮廷を男同士の絆を極めて重要視するホモソーシャルな世界として描き出している。そのホモソーシャルな絆を安定して維持するための考え方が宮廷内で共有されており、国王が一部の者とだけ親密になることで他の臣下を蔑ろにして、王の責務が果たされないことは非常に問題視された。つまり、ガヴェストンはエドワードと性的な関係を結んでいるとして糾弾されているのではなく、国王がホモソーシャルな絆を壊す行動を取る原因として批判されている。これはまた、ガヴェストン批判の形を取った間接的な国王批判としても機能している。

その一方で、ディスペンサーに対する批判は、彼の政治的な動きや経済活動に対する内容が圧倒的多数である。ガヴェストンを描写する際に用いられていた、「友人」や「兄弟」のような王との関係性を示す語や説明は、ディスペンサーには全く使われていない。そこに見られるのは王と王国全体を混乱に陥れる「邪悪な」側近の姿である。しかし、ディスペンサー批判において最も特徴的かつ強烈なインパクトを与えているのは、ディスペンサーが「夫婦の絆を壊す存在」であるという王妃イザベラによる告発である。それまで、政治または経済活動の文脈で語られてきたディスペンサー批判が、突然彼のセクシュアリティに関する批判に変化する。ソドミーは教会法における明確な罪であることから、ディスペンサーがソドミーであると示すような批判が公に行われるということは、エドワードとディスペンサーの関係がイングランド宮廷内だけの問題に留まらなくなるということである。要するにイザベラは、ディスペンサーとの対立において、エドワードの妻である彼女にしか出せない最大の切り札を切ったのである。

最後に、ガヴェストンに対する批判とディスペンサーに対する批判の性質が、何故このように異なっているのかについて考察したい。明確な理由を示すことはできないが、いくつかの仮説を挙げることはできる。

まず、人物の特性の差異が挙げられる。*Vita*が引用した改革勅令の内容によれば、ガヴェストンは王を墮落させ、国を混乱させ、国の財産を浪費した<sup>51</sup>。しかし、彼がどのような形で国の財産を浪費したかという具体的な記述は*Vita*内にほとんど記載されておらず、彼が犯した罪は明白な形では示されていない。彼の最大の落ち度は、彼が他の諸侯よりも飛びぬけて王と親しくなることで、宮廷内の調和を壊す行動を王に取らせたことである。一方でディスペンサーは、ウェールズ辺境での強引な所領拡大策など、誰が見ても明白な罪というものを多量に犯している。その上で、王妃によるディスペンサーのホモセクシュアル批判が出てくる。この流れは、アラン・ブレイ (Alan Bray) が近世イギリスを対象とした研究で述べた、政治や経済活動上の罪のようなセクシュアリティ以外での罪が明白である際に初めて当人のセクシュアリティが問題視されるという説に当てはまるのではないだろうか<sup>52</sup>。つまり、同性愛的な行為を行っている人物が社会秩序を脅かす際に初めて、同性愛批判が顕在化してくるということである。実際のところガヴェストンも王と同性愛関係にあったかもしれないが、男同士の強い絆を維持しようとする宮廷社会においては、セクシュアリティ以外の問題が明白に顕在化しない限り、ホモセクシュアル批判には至らなかったのではないかと推察される。

次に、ガヴェストンの記述が書かれた時期からディスペンサーの記述が書かれた時期にかけて、セクシュアリティに関する人々の態度が硬化していったという推測が成り立つように思われる。14世紀が始まってから三十年に満たない間に、イングランド、またイングランドと密接な繋がりを持っているフランスにおいて、セクシュアリティ絡みで複数の弾圧があった。1303年に教皇ボニファティウス八世が逮捕された際の嫌疑、また1307年のフランスにおける Templar 騎士団員の一斉逮捕の嫌疑にはどちらもソ



ドミーが含まれていた。このテンブル騎士団の事件はイングランドにも影響を与えており、*Vita*と同じく同時代に書かれた年代記のひとつ『ロンドン年代記 (*Annales Londonienses*)』にも詳しく経過が書かれている<sup>53</sup>。1314年には、フランス王フィリップ四世が息子三人の妻全員を不義密通罪で逮捕するという事件も起こる。これらの事件のほとんどはフランスを舞台におきたものではあるが、フィリップ四世の娘であるイザベラを王妃として迎え、フランス宮廷とも密接な繋がりがあったイングランド宮廷にとっても関わりの深い事件であるといえる。このような事件が当時のイングランド宮廷を取り巻く人々のセクシュアリティに対する態度を不寛容にさせていったとすれば、エドワード二世治世の初め頃に書かれたガヴェストンに対する描写と治世終わり頃に書かれたデイスペンサーに対する描写に差があるのも、時間の経過を理由に説明することが可能と考えられる。実際に、エドワード二世治世末期には、上述のようにイザベラがデイスペンサーに対してホモセクシュアル批判を行っただけでなく、ヘレフォード司教アダム・オルトンがエドワード二世治世下において初となる国王に対するソドミー批判を行っている<sup>54</sup>。1326年に行った説教の中で、オルトンはエドワードがソドミーの罪に耽っていると述べた。これらのことから、エドワード二世治世が進むに連れて、イングランド宮廷とそれを取り巻く人々の間で、エドワード自身とエドワードに近い者たちに対する眼差し、特にセクシュアリティに関する面での眼差しが変化していったと推測することは可能ではないだろうか。

以上の二つの推測が実際に妥当であるかどうかは、今後、より考察を深めていきたい。また、*Vita*で用いられたガヴェストンとデイスペンサーの批判の違いが同時代の別の年代記においても同様に指摘できるかを確認することで、*Vita*の著者の見解が同時代の年代記作者に共通のものであるかの研究も、これからの課題としたい。

(つねき・さやか／お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科比較社会文化学専攻  
博士後期課程)

掲載決定日：2010（平成22）年12月10日

## 注

- 1 エドワードとガヴェストン、デイスペンサーの関係をホモセクシュアルであると論じている全ての学術論文をここで挙げることはできないが、代表的なものとしてJ. R. Maddicott, *Thomas of Lancaster, 1307-1322: A Study in the Reign of Edward II*. London: Oxford University Press, 1970; J. R. S. Phillips, *Aymer de Valence, Earl of Pembroke, 1307-1324: Baronial Politics in the Reign of Edward II*. Oxford: Clarendon Press, 1972; J. S. Hamilton, *Piers Gaveston, Earl of Cornwall, 1307-1312: politics and patronage in the reign of Edward II*. Detroit: Wayne State University Press and London: Harvester-Wheatsheaf, 1988がある。
- 2 C. Sponsler, "The King's Boyfriend: Froissart's Political Theater of 1326." In G. Burger and S. F. Kruger eds. *Queering the Middle Ages*. Minneapolis: University of Minnesota Press, 2001, pp. 143-167; W. M. Ormrod, "The Sexualities of Edward II" In G. Dodd and A. Musson eds. *The Reign of Edward II: New Perspectives*. Woodbridge: York Medieval Press, 2006, pp. 22-47; I. Mortimer, "Sermons of Sodomy: A Reconsideration of Edward II's Sodomitical Reputation" In G. Dodd and A. Musson eds. *op. cit.*, pp. 48-60.
- 3 N. Denholm-Young, ed. *Vita Edwardi Secundi: The Life of Edward the Second by the So-called Monk of Malmesbury*, London: T. Nelson, 1957; W. R. Childs, ed. *Vita Edwardi Secundi: The Life of Edward the Second*. Oxford: Clarendon Press, 2005. [以下VESと略記] 両方ともラテン語原文に英訳が併記。本稿では、新訳のVESを使用。刊本のもとになっているマニユスクリプトは1729年に作成された原写本の写しであり、14世紀（1348年以降と推測されている）に作成されたとされる原写本

は現存していない。但し、18世紀に作成された写しは原写本を極めて正確に写しているとみなされている。また、写しを見る限りでは、原写本はオリジナルのマニユスクリプトを極めて正確に写している可能性が高いと判断されている (*VES*, pp. xv-xix.)。

- 4 *VES*についての研究は、A. Gransden, *Historical Writing in England*. ii: *c.1307 to the Early Sixteenth Century*, New York: Cornell University Press, 1983, pp. 31-37.と *VES*, pp. xv-lx.を参照。
- 5 ノエル・デノルム＝ヤング (Noël Denholm-Young) は、*Vita*の著者に聖ポール司教座聖堂の参事会員であったジョン・ウォルウィン (John Walwayn) の名を挙げている (Denholm-Young, *op. cit.* pp. xix-xxviii.)。 *VES*の新訳者であるウエンディ・チャイルズ (Wendy Childs) はウォルウィンであると特定はできないとしながらも、少なくとも類似の経歴を持つ人物であることは認めている (*VES*, pp. xxiv-xxv.)。
- 6 *VES*, pp. xix-xxiii.
- 7 クリス・ギブン＝ウィルソン (Chris Given-Wilson) は、*Vita*の著者が自身の覚書をもとに、数年おきにまとめて叙述を行った可能性を指摘している。C. Given-Wilson, "Vita Edwardi Secundi: Memoir or Journal?" In M. Prestwich, R. H. Britnell and R. Frame eds. *Thirteenth Century England*. vi, Woodbridge: Boydell Press, 1997, pp. 165-176.
- 8 H. R. Luard, ed. *Flores Historiarum*. 3 vols., Rolls Series, London: Eyre and Spottiswoode, 1890.
- 9 『モ一年代記』は、エドワードが「大いにソドミーの悪 (vitium sodomiticum) に耽っていた」と記述。E. A. Bond, ed. *Chronica monasterii de Melsa, a fundatione usque ad annum 1396, auctore Thoma de Burton, abbate, accedit continuatio ad annum 1406, a monacho quodam ipsius domus*. ii, Rolls Series, London: Longmans, Green, Reader, and Dyer, 1867, p. 355.
- 10 *Annales Paulini* : W. Stubbs, ed. *Chronicles of the Reigns of Edward I and Edward II*. i, Rolls Series, London: Longman, 1882, pp. 255-370 ; Luard, *op. cit.*, iii, pp. 137-235.
- 11 J. Burgdorf, "With my life, his Joyes began and ended: Piers Gaveston and King Edward II of England Revisited" In N. Saul ed. *Fourteenth Century England*. v, Woodbridge: Boydell Press, 2008.
- 12 イヴ・K・セジウィック『男同士の絆：イギリス文学とホモソーシャルな欲望』上原早苗、亀澤美由紀訳、名古屋大学出版会、2001年。本稿では、*Vita*に描かれた宮廷のように女性の姿が極めて稀にしか登場しない男性中心の社会において、男性同士の間に築かれた緊密な連帯関係をホモソーシャルな関係として論じる。
- 13 騎士道に則った方法で騎士は貴婦人に愛を捧げ、貴婦人の愛を勝ち取る。そのことにより、騎士は自らが異性愛者であり女性を支配できる存在であると証明し、他の騎士から一人前の男性として受け入れられるという構造が指摘されている。同時に、女性が排除されている軍事活動の場面において、騎士が互いに愛と忠誠を誓い合う強い男性同士の絆が存在したことが指摘されている (R. M. Karras, *From Boys to Men: Formations of Masculinity in Late Medieval Europe*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 2002, pp. 20-66.)。
- 14 P. Chaplais, *Piers Gaveston: Edward II's Adoptive Brother*. Oxford: Clarendon Press, 1994.
- 15 *VES*, p. 26 (lines 24-28).
- 16 *VES*, p. 4: 'Fuerat autem dictus Petrus, uiuente rege Edwardo sene, iuuenis Edwardi, tunc principis Wallie, camerarius familiarissimus et ualde dilectus, quod manifeste satis apparuit non multo post.'
- 17 *VES*, p. 26 (lines 18-20).
- 18 *VES*, p. 28 (lines 11-14).
- 19 *VES*, p. 28 (lines 9-11).
- 20 *VES*, p. 4 (lines 18-19).
- 21 *VES*, p. 4 (lines 16-18); p. 26 (lines 16-22); p. 28 (line 14).
- 22 *VES*, p. 12 (lines 17-19).
- 23 *VES*, p. 38 (lines 5-13).
- 24 *VES*, p. 50 (line 4); p. 100 (line 27).
- 25 *VES*, p. 152 (lines 4-6).
- 26 *VES*, p. 10 (lines 8-12).
- 27 *VES*, p. 14 (lines 29-30); p. 16 (lines 1-4).
- 28 *VES*, p. 14 (lines 22-25).
- 29 *VES*, p. 32 (lines 6-7).

- 30 VES, p. 50 (lines 2-4).
- 31 Burgtorf, *op. cit.*, pp. 39-40.
- 32 VES, p. 4 (lines 18-20).
- 33 VES, p. 30 (lines 7-9).
- 34 VES, p. 4 (lines 22-25).
- 35 VES, p. 8 (lines 5-8).
- 36 J. F. Niermeyer and C. Van de Kieft, *Mediae Latinitatis Lexicon Minus*. Leiden: Brill, 2002, p. 54; R. E. Latham, *Dictionary of Medieval Latin from British Sources*. fasc. 1, London: Oxford University Press for the British Academy, 1975, p. 78.
- 37 王の傍からガヴェストンを引き離すことで、諸侯が真の愛 (verus amor) と真の調和 (vera concordia) を生じさせようとしたと記されている。VES, p. 12 (lines 14-15).
- 38 VES, p. 28: 'Modum dileccionis rex noster habere non potuit, et propter eum sui oblitus esse diceretur, et ob hoc Petrus malificus putaretur esse.' エドワードのガヴェストンへの愛が「節度がない」「普通でない」という表現は、エドワード二世治世に書かれた複数の年代記に見られる。 *Annales Paulini*, p. 255; *Flores Historiarum*, p. 146; H. T. Riley, ed. *Johannis de Trokelowe, et Henrici de Blaneforde monachorum S. Albani, necnon quorundam Anonymorum, Chronica et Annales*. Rolls Series, London: Longmans, Green, Reader, and Dyer, 1866, p. 64.
- 39 VES, p. 194 (line 12); p. 194 (line 28).
- 40 VES, pp. 182, 184, 186, 188, 190, 192, 194, 196.
- 41 VES, p. 192 (lines 34-36); p. 194 (lines 1-2).
- 42 VES, p. 194 (lines 15-17); p. 194 (lines 27-28).
- 43 VES, p. 228 (lines 10-13).
- 44 VES, p. 228 (lines 14-16).
- 45 VES, p. 228 (lines 13-14).
- 46 J. R. S. Phillips, *Edward II*. New Haven: Yale University Press, 2010, p. 485. この台詞の持つ意味について、フィリップスはこれ以上の言及をしていない。
- 47 VES, p. 242: 'respondit regina, 'Ego,' inquit, 'senciens, quod matrimonium sit uiri et mulieris coniunctio, indiuiduam uite consuetudinem retinens, mediumque esse qui inter maritum meum et me huiusmodi uinculum nititur diuidere; protestor me nolle redire donec auferatur medius ille, set, exuta ueste nupciali, uiduitatis et luctus uestes assumam donec de huiusmodi Phariseo uiderim ulcionem.'
- 48 Niermeyer, *op. cit.*, p. 325.
- 49 マイケル・プレストウィッチ (Michael Prestwich) は、イザベラの台詞で言及されている「侵入者」が誰を指しているかについて、デイスペンサーの妻であるエリナーを示唆しているとする姦通説の可能性を挙げた上で、別の「明白な」説明として、デイスペンサー自身を示しているとするホモセクシュアル説を挙げている。M. Prestwich, *Plantagenet England 1225-1360*. New Oxford History of England, Oxford: Clarendon Press, 2005, p. 214. どちらの可能性もあり得ることは否定できないが、*Vita*の文脈からのみ判断すると、デイスペンサー自身を示しているのが妥当である。
- 50 この点について明確に指摘している研究は、管見の限りでは見当たらない。
- 51 VES, pp. 34, 36.
- 52 アラン・ブレイ『同性愛の社会史：イギリス・ルネサンス』田口孝夫、山本雅男訳、彩流社、1993年、126-129頁。
- 53 *Annales Londonienses* : Stubbs, *op. cit.*, pp. 3-251.
- 54 Mortimer, *op. cit.*, pp. 48-60.

## 参考文献

- Bond, Edward Augustus ed. *Chronica monasterii de Melsa, a fundatione usque ad annum 1396, auctore Thoma de Burton, abbate, accedit continuatio ad annum 1406, a monacho quodam ipsius domus*. ii, Rolls Series, London: Longmans, Green, Reader, and Dyer, 1867.
- Bray, Alan. *Homosexuality in Renaissance England*. London: Gay Men's Press, 1982. (アラン・ブレイ『同性愛の社会史：イギリ

ス・ルネサンス』田口孝夫、山本雅男訳、彩流社、1993年)。

- Burgtorf, Jochen. "With my life, his Joyes began and ended': Piers Gaveston and King Edward II of England Revisited" In Nigel Saul ed. *Fourteenth Century England*. v, Woodbridge: Boydell Press, 2008.
- Chaplais, Pierre. *Piers Gaveston: Edward II's Adoptive Brother*. Oxford: Clarendon Press, 1994.
- Childs, Wendy R. ed. *Vita Edwardi Secundi: The Life of Edward the Second*. Oxford: Clarendon Press, 2005.
- Denholm-Young, Noël. ed. *Vita Edwardi Secundi: The Life of Edward the Second by the So-called Monk of Malmesbury*, London: T. Nelson, 1957.
- Given-Wilson, Chris. "Vita Edwardi Secundi: Memoir or Journal?" In Michael Prestwich, Richard H. Britnell and Robin Frame eds. *Thirteenth Century England*. vi, Woodbridge: Boydell Press, 1997.
- Gransden, Antonia. *Historical Writing in England*. ii: *c.1307 to the Early Sixteenth Century*, New York: Cornell University Press, 1983.
- Hamilton, Jeffrey S. *Piers Gaveston, Earl of Cornwall, 1307-1312: politics and patronage in the reign of Edward II*. Detroit: Wayne State University Press; London: Harvester-Wheatsheaf, 1988.
- Karras, Ruth Mazo. *From Boys to Men: Formations of Masculinity in Late Medieval Europe*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 2002.
- Luard, Henry Richards ed. *Flores Historiarum*. iii, Rolls Series, London: Eyre and Spottiswoode, 1890.
- Maddicott, John Robert. *Thomas of Lancaster, 1307-1322: A Study in the Reign of Edward II*. London: Oxford University Press, 1970.
- Mortimer, Ian. "Sermons of Sodomy: A Reconsideration of Edward II's Sodomitical Reputation" In Gwilym Dodd and Anthony Musson eds. *The Reign of Edward II: New Perspectives*. Woodbridge: York Medieval Press, 2006.
- Ormrod, William Mark. "The Sexualities of Edward II" In Gwilym Dodd and Anthony Musson eds. *The Reign of Edward II: New Perspectives*. Woodbridge: York Medieval Press, 2006.
- Phillips, John Roland Seymour. *Aymer de Valence, Earl of Pembroke, 1307-1324: Baronial Politics in the Reign of Edward II*. Oxford: Clarendon Press, 1972.
- . *Edward II*. New Haven: Yale University Press, 2010.
- Prestwich, Michael. *Plantagenet England 1225-1360*. New Oxford History of England, Oxford: Clarendon Press, 2005.
- Riley, Henry Thomas. ed. *Johannis de Trokelowe, et Henrici de Blaneforde monachorum S. Albani, necnon quorundam Anonymorum, Chronica et Annales*. Rolls Series, London: Longmans, Green, Reader, and Dyer, 1866.
- Sedgwick, Eve Kosofsky. *Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire*. New York: Columbia University Press, 1985. (イヴ・K・セジウィック『男同士の絆：イギリス文学とホモソーシャルな欲望』上原早苗、亀澤美由紀訳、名古屋大学出版会、2001年)。
- Sponsler, Claire. "The King's Boyfriend: Froissart's Political Theater of 1326." In Glenn Burger and Steven F. Kruger eds. *Queering the Middle Ages*. Minneapolis: University of Minnesota Press, 2001.
- Stubbs, William. ed. *Chronicles of the Reigns of Edward I and Edward II*. i, Rolls Series, London: Longman, 1882.